

江戸時代の松前街道は、現在の青森市油川から外ヶ浜町三厩に至る道で、奥州街道の延長路にあたる。松前藩主をはじめ、蝦夷地を往復する幕府や諸藩の役人が通行し、また、蟹田や今別など、弘前藩九浦に数えられる藩の主要港もあった。しかし、山越えの険しい道や、波打ち際や磯浜を通る難所も各地に存在し、旅人を悩ませた。



南谿らが通過した「犬くぐり」の現況。現在、旧街道は海中に没し、干潮時以外はくぐるのは難しい。(筆者撮影)

8)年で、江戸時代最大の飢饉である天明の大飢饉の直後であった。南谿は外ヶ浜地域のある集落では、骸骨がごろごろしていたと記す。真澄も、別の記録では人肉を食べた男の告白を聞いている。今別周辺に限って言えば、3人の記録に

18世紀中期以降、交通路の発達から日本各地の風俗や産物、自然などへの関心が高まり、当地を訪れる文人や紀行家による来遊も増加した。このなかから、橋南谿、古川古松軒、菅江真澄の3人の記録から、とくに今別周辺の様子を見ていこう。

彼らが当地を訪れたのはほぼ同時代、1785(天明5)年から88(天明

は直接の言及はない。古松軒の記録には、当時の今別町の町並みに関する記述がある。幕府巡見使に同行した彼らしい視点であり、「決して大きな町ではないが、家の作りが大きく100石くらいの船が7〜8艘ある、湊町は金銭的に豊かなのか遊女もいる」など、津軽半島の木材の積出港として栄えている様子を記す。

松前街道を歩く

今別周辺から

中野渡 一耕

(県民生活文化課
県史編さんグループ総括主幹)

近にあり、ベンガラ(赤鉄鉱。顔料となる)が自然露出している沢で、江戸時代初期から弘前藩による採掘が行われた。幕府にも献上され、日光東照宮の修復にも使用された。

南谿は「川や谷だけでなく、川が流れ出る海の魚の色まで赤くなっている」といささかオーバーに書いている。しかし、この頃には

しかし、3人からやや遅れて今別を訪れた高山彦九郎の記述には、戸数が約300軒だったのが、53軒に減ってしまったと書かれており、全く被害はなかった訳ではないのである。

3人に共通する部分として名所や産物への関心がある。「赤根沢」「舍利浜」「瑪瑙浜」については詳しく記す。赤根沢は高野崎付

により減ったようだ。このほか、現在「松陰くぐり」と称される大泊地区にある海食洞「犬くぐり」も、3人とも触れている。当時の松前街道は磯浜を通る難所がしばしばあり、自然のトンネルをくぐる風景は強い印象を与えたようだ。ちなみに吉田松陰がここを通った記録は、残念ながらない。

真澄には古松軒と違い地誌的な記述はあまりないが、神社の伝説や風景に関心が深く、記載は微細を極め、対照的である。現今別町の部分ではあまり人々の生活に関する言及はないが、三厩部分では和人に同化した津軽アイヌの子孫の記述などがあり、歴史的に貴重な記録である。

また、巡見使の応対準備に忙殺される村人の様子を書いているが、同じ旅行者でも古松軒は応対される側の立場にいたのである。古松軒の記録には今別の後に、巡見使に対し秘密主義の津軽の人々を憤っている記述もある。3人の立場の違い、考え方の違いがでて興味ぶかい。